「受けるよりは与える方が幸いである」 ジョン・スタインベック「朝食」(1938) 一分かち合うということ

増永 俊一 教授

(アメリカ文学・文化)

長らくここ経済学部で働いてきたが、残すところあと僅かとなった。授業担当や研究、大学校務など様々なことに携わってきたが、このチャペルでの講話の担当もその内のひとつである。私は経済学部にも所属しているが、専門分野は経済学ではない。アメリカ文化や文学だ。学部で担当するのは主に英語教育、一方、チャペルの参加者は文学部生ではなく経済学部生であるという中で、このチャペル講話で何を話すべきかずっと模索してきた。

今日、配付資料としてお配りしているものは、そのような試行錯誤の中で生まれてきた素材のひとつである。これはジョン・スタインベックというアメリカの小説家書いた「朝食」というスケッチで、僅か3ページにも満たない本当に短い作品だが、とても味わい深い物語だ。資料はその全編を私訳したものと英語の原文となっている。英語も比較的平易である。あらすじはきわめて平明で、この題名がすべてだ。主人公は「私」。とても寒い日で、早朝どこか山中の谷間を「私」が歩いているとテントが見えてくる。その前で若い女性が朝食の準備をしている。片腕には赤ん坊を抱え、授乳をしながらの朝食準備である。ほどなくテントの中から若い男と年配の男が出て来る。若い男は朝食を準備している女性の夫、年配の男はその父親である。「私」と彼らは朝の挨拶を交わし、おもむろに年配の男が「私」に問いかける。「もう朝飯は食ったか」と。「私」はこうして彼らの朝食の場に招かれ、食事を共にすることになる。朝食の献立は、ベーコン、オーブンで焼いたパン、熱いコーヒーがそのすべて。

以前チャペルでこの物語を取り上げたことがあるのだが、学生から様々な感想が寄せられた。ある学生は、翻訳で読むのと英語原文で読むので受ける印象が違うと書いていた。実際に原文も読んで、英語と日本語との違いを体感してくれたことは英語の授業を担当する者としては喜ばしかった。また、ある学生は自分で小説を書いているらしく、人間の五感すべてを動員するこの作品の描写はとても参考になったと書いていた。朝焼けが山肌を照らし、段々とあたりが明るくなっていく様子は視覚、そこはとても静かで赤ん坊が母親の乳房を吸う音だけが聞こえてくるのは聴覚、焼き上がるベーコンとパンの香ばしい匂いは嗅覚、その味は言うまでもなく味覚、そしてとても熱いコーヒーが喉を焦がすのは触覚。こんな感想もあった。「今朝は朝ご飯を食べていないので、犯罪級にたまらなく空腹に襲われちゃいました」。また、別のコメントは「分厚いベーコンが食べたい！」と。すぐれた文学作品は読者の感情を揺さぶる。

やがて、この男たちがどういう人物かということも静かな会話の中で明らかにされていく。彼

らの仕事は「綿摘み(picking cotton)」。自分の土地を持たない季節労働者で、日雇い労働者だということが分かる。彼らはその仕事に連続して12日間もありつけた。温かい食事を取ることが出来、新しい服が買えるようになったことを彼らは素朴に喜ぶ。そして、その喜びを共有しようとたまたま通りがかった「私」に声を掛けたのだ。この慎ましい充足感に、「私」と共に読者も共感する。何とこのベーコンとパンとコーヒーだけの朝食は美味しいそうなのかと。そして、決して裕福ではない季節労働者の心が、その温かい食事同様温かいのかと。朝食を食べ終えて、「私」はその場を静かに後にする。そして、その体験を思い出す度に私を温かな気持ちにしてくれる「ある素晴らしい美の要素 (some element of great beauty)」がそこにはあったと書いて、このスケッチは終わる。

さて、日本の経済体制が資本主義経済あることは誰もが知っているが、では「資本主義の目的」は何かといわれればどう答えるだろうか。実際に何度か学生に聞いた事があるが、答えられる学生はむしろ少なかった。それは端的に言って「飽くなき利潤の追求」だ。与えるのではなく、むしろ奪う。現在、新自由主義の元、世界中で経済格差がますます広がっている。上位10%の富裕層が実に全世界資産の76%を独占している。電気自動車のテスラ社のCEO、イーロン・マスクの資産は今年度53兆5000億円に上る。スタインベックは「季節労働者」に心を寄せたが、現在の日本の文脈に置き換えるならば、「非正規労働者」と言えるかも知れない。「非正規雇用」というものが拡大していく中で、人々は心の余裕といったものを失いつつあるのではないだろうか。この「朝食」というスケッチで描かれているようなささやかな充足感と人間の温かさ。こういったものに、人々はますます憧憬の念を強めているのかも知れない。「分かち合う」ということ、それは関学のスクールモットーである「Mastery for Service」の一要素かも知れない。現在のこのような状況の中で、水や医療、教育などの社会の共有材、コモンを取り戻そうという動きも出て来た。今でこそ、このスケッチで描かれているささやかではあっても喜びを共有するという精神が、静かに広がっていくことを願わずにはおれない。